

4

2021

三重病院

ニュースレター

news letter vol.260

01 院長退任のご挨拶

02 臨床研究部からのお便り—第35回—

通所支援事業のひとコマ

03 異動のごあいさつ

やまばとギャラリー情報コーナー

三重病院のウォーキングコースvol.3

04 病院からのお願い

外来からのお知らせ／外来診察のご案内

院長退任のご挨拶

藤澤 隆夫

2021年3月31日をもって、院長を定年退職いたしました。2015年より6年間、職員の皆様、地域の皆様、関係諸機関の皆様のおかげで、務めさせていただきましましたことを心より感謝いたします。

三重病院のこれまでの歩み

三重病院は1939年に開設、歴史は80年以上です。当時の難病であった結核に取り組みましたが、現在の2倍近くの500床を有したとのことで、いかに重大な疾患であったか想像できます。その後、治療の進歩で結核が減少すると、1968年から整形外科リハビリテーション、1976年からは小児医療と、医療ニーズに合わせた転換を図りました。小児医療は急性疾患とともに慢性腎臓病、県立一志病院から移った重症喘息など小児慢性疾患にも力を入れてきました。1994年からは小児外科を開設、さらなる強化を図っています。整形外科リハビリテーションも発展を続け、現在は小児整形外科の専門施設として、全国的にも知られるところです。結核医療は1991年に終了しましたが、1998年の国立病院統合の際に、重症心身障がい児(者)病棟(やまばと病棟)を開棟、さらに内科(慢性呼吸器疾患)、神経内科(神経難病)の病棟も整備しました。難病をもちながら一生懸命生きておられる患者さんへの治療、リハビリテーション、療養を提供することを「セーフティネット医療」と言いますが、以来、小児医療とセーフティネット医療は三重病院の両輪となりました。このように時代とともに変わる地域の医療ニーズに応え続けてきたのが三重病院の歴史と言えるでしょう。

歴代院長と三重病院の発展

そのような発展のためにリーダーシップをとられた最近の歴代院長を紹介します。結核医療からの転換で、リハビリテーションと小児医療を開設されたのは、胸部外科医として結核医療に取り組まれていた安藤良輝院長です。その後は、いずれも小児科医で、感染症の権威として予防接種政策などわが国の感染症対策に指導的役割を

果たされた神谷齊院長、庵原俊昭院長が、三重病院をさらなる発展に導かれました。両先生は人材を集めて、上に述べた医療体制の強化を図るとともに、神谷先生は2003年に現在の外来診療棟、庵原先生は2011年に現在の中央病棟を建築され、旧療養所の古い建物をすべて一新されました。整えられた建物を引き継ぎました私は、やまばと病棟の増改築を2021年に取りかかる準備のみさせていただいた次第です。

また、三重病院には2002年から臨床研究部が設置されて、新しい治療開発や病気のメカニズム解明など研究にも取り組んでいます。神谷先生は臨床研究部が設置される前から、研究を重視され、動物実験設備を含む研究室を院内に整備されていました。私も若い頃、診療の合間に、四日市公害喘息のメカニズムを調べようと、モルモットの実験に取り組んだことを懐かしく思い出します。病院でありながら、大学並みの研究施設を整備された神谷院長の先見の明は、庵原院長に引き継がれ、新病棟建築時には旧病棟を全面改装して、さらに大きな研究棟を作られました。これが、現在、三重病院が研究の面でも活躍できる基盤となっています。

院長として

私は、三重病院が良い医療を提供していくためには、職員が和気藹々、楽しく働くことがもっとも大切と考えました。そこで、院長に求められるのは良きコーディネーターであることです。5つのキーワード、①患者さんのために、②新しいこと(イノベーション)、③楽しく、④仲良く、⑤健全に(土台としての経営)を掲げましたが、どれほど実現できたかは心許ないところもあります。しかし、すべて皆さんのおかげで三重病院が存続し、発展の道にあることは間違いないと信じています。

後任は、感染症の権威で、現在、新型コロナウイルス対策でも活躍されて皆さんもテレビなどでおなじみの谷口清州院長です。ますますの発展を祈念して、バトンを渡します。